

漢書卷之九

林





顔顥發句集秋部

七月

立秋

秋暮と書月はらう萩老聲  
ひくくと木はこ動く秋を以  
来る秋風をかりてもかかり  
候たのやち骨は志老の色  
秋の川や中子吹く雲のよ  
帷子老屋を以てやはりの秋  
秋の色も海をたぬるる



蝶夢編

重頼 宛貴 北枝 萬海 尤次 尚志 支考



早稲田大学  
文学部図書

雄末英雲  
53-7520

初秋

毎年の初秋一秋と云ふは  
秋の初秋の初秋と云ふは  
秋の初秋の初秋と云ふは  
秋の初秋の初秋と云ふは  
秋の初秋の初秋と云ふは  
秋の初秋の初秋と云ふは  
秋の初秋の初秋と云ふは  
秋の初秋の初秋と云ふは

秋風 吾伴 志川 後川 山 色 川 元

秋一

一葉

相の葉も汲分りて井戸の水  
秋の葉も汲分りて井戸の水  
秋の葉も汲分りて井戸の水  
秋の葉も汲分りて井戸の水  
秋の葉も汲分りて井戸の水  
秋の葉も汲分りて井戸の水  
秋の葉も汲分りて井戸の水  
秋の葉も汲分りて井戸の水

徳元 明水 苔蘚 尚心 宛費 すす 芙蓉 浮木 山川 任録 風徐

柳散

葉うちりて中かろ交節は  
七散葉は枝散る影やちり柳  
さうりておろ風の吹れ交ち  
ちり柳葉一まのほつれをり

三風  
去芳  
老士  
葵舟

楸散

揚燈籠

高燈籠屋あおるに柱う柳  
山寺の炭よりたう交燈籠は  
人羣あはれく梢葉灯籠は  
高燈籠梢の秋をさう沈れ  
揚燈籠あくさへ葉の物表ま

子那  
称九  
言水  
蓮之  
柳風

攝侍

秋二

硯洗

七夕

あつたは乃葉よまわ萩も北  
揚侍りまの山人哉を先より  
硯洗不日や湯うさ散御湯水  
かろく散あらん葉を散  
七夕や秋をさうおけけ散  
初小の末葉おといま葉の乾  
無葉葉り梳針さおけけ一途  
解さゆて七日の夜のゆわは  
七夕や鴨川より散牛くさゆ  
月入るはこころの星の園

暮秋  
去雷  
尾辰  
俊似  
江戸  
心清  
桐節  
芭蕉  
、  
之角  
猿鏡  
嵐雪  
去芳

乙の川

河合や松よりさやく秋の声  
乳を交はは先や星のまをり  
七夕わたり志あふ夜もあふ  
指さくく星の教えりか夜ぶ  
文りや水田あふと世を乙の河  
り月のさぬ教あふおる川  
去夜ややゆりかをりる天の河  
大切な教あふりりる乙の河  
あふおはして志あふおる川  
嘆つれりあふくくのもも天の河

芦木 乙由 老士 木兒 性成 如川 岩室 乙角 山嶺 加涼

秋三

鶴の橋

二まきあちま契之阿戸川  
松風か巻落こむきや乙の河  
乙の川東へはまを志るんり  
橋ゆかろ鳥あつる夕の尻  
かきくれや橋も一夜のうけは  
ほい合や鶴女も教の糸とん  
色くくは深あま糸乃秘あひ  
立あやや松の志くあ虫の巻  
立琴やひくも恨巻教をん  
吹すもくく月と成りり乙の河

文系 門懸 康工 其角 松舟 嵐雪 可風 武蔵 西羊

秋の糸

立琴

芋の糸露

梶の葉

七夕綯

送の峯入

定詩

盃蘭盆

盆の月

梶の葉のや表ふかしの物の中

梶の葉れ及古や軍の物あり

星の光りて月くもく鞠はれ

峯入や控者録も吹立不

おとひく物とあつて定詩

志々子と流うもん起る子

盃らりて秋の夜に集りり

衣足と子賣とらるる盆の中

ありありと流しうれや盆の中

踊るも月を酔く盆の月

由平

宇冬

化老知

馬六

嵐雪

富治

榎子

由水

白定

李由

秋四

菟祭

盆の月夜とくや門とあま

ほきくと在るあま菟祭

菟の葉の葉を川うや親の故

霊柩やこれあまくと茄子

喰物もみか水ききと菟祭

起のふんしくや隣の菟まつ

能く出くかしの世に菟祭

たふ祭これあまの夜に菟祭

菟の葉や刺すけり不菟祭

玉きりて暢うあまると菟祭

師披

季吟

去来

嵐雪

其角

丈草

野坡

酒半

北枝

棚経

魂まつ梁解よ女衣は若かり  
け魚衣親よふくや雪馬  
中<sup>中</sup>海祭ゆりさふ灯をうた  
亮柳や神成ひまへく着くら  
去番衣ひる万さ世や亮祭  
魂<sup>魂</sup>のつとけよえへし佛蓮  
たま柳や灯をほおへ草の親  
亮柳や隔り蚊のなくおくら  
柳院やまゆりもや又杖策  
棚経やあいにしはかくゆき

浪化  
氷花  
蘊守  
温故  
忍尺  
掌陀  
涼袋  
凉秀  
如行  
宗后  
伊勢

秋五

蓮飯

麻木箸

菰尾草

蓼糸

従ふもふおさそ蓮の飯  
松の葉よりつむむの枝蓮飯  
親の枝よまじ果や柳麻木  
あはれ人お教を麻木よ打せり  
あはれ世や麻木の若れ虫より  
ましくやまを萩葉のゆき  
菰尾草の被よか乾洞那  
家あまれ枝よふ髪<sup>髪</sup>の蓼糸  
尺へも孫子と来て蓼糸  
灯籠の外ま蓼糸よおま

一髪  
支考  
青矩  
全峯  
也有  
梅氏  
枕妖  
芭蕉  
去来  
一笑

生身玉

生身玉のあつさや養系  
虫の毒れ宗有くや養系  
せ先く急の骨よをて生身玉  
生身玉酒のさうな親父ど  
焼養了あつて目出く生身玉  
を身よふさるく生や生身玉  
遠系もく起在の徳よを危  
送り火や安婆の思れ哉子  
のい巻く遠の系捨るあふれ  
送り火や勢ひくくり独り云

蓮之  
乙信  
方山  
其角  
支考  
波村  
木因  
六吉  
玄南  
梅笠

送り火

大文字火  
妙法火

舟形火  
焼籠

送り火やゆきひ遠く水の上  
送り火や安婆の思れ哉子  
大文字や一葉山深き火  
妙法字や松崎よけり弟妹  
酒と焼く大形もや秋の風  
舟の火消ゆくや音の海  
見よへもや焼籠よほりりり  
ふも架の久しう送り切籠  
同一灯と切籠よ見よの表あり  
送るも秋あまの焼籠が

杜吾  
巨妙  
篠後  
友香  
岩雪  
比老  
其角  
尚公  
木因  
嵐雪



踊

度々家の蛇籠をり月夜に  
凡そもの子掻きさせぬ蛇籠に  
灯籠下り夜の深衣小浴衣那  
吹きてあえけ乙女如地籠に  
踊り子の顔と背りら切籠に  
一しり待人運籠とやら那  
我の残るゆい小通る踊り那  
小娘の生き起ちりけ籠  
ゆめいそちる交度と踊り  
茶も煮あれ一汗煮とやら

<sup>江戸</sup>未陌  
野子  
已静  
<sup>能</sup>司籠  
<sup>丹後</sup>玉尾  
尚白  
万平  
其角  
与考  
三将  
秋七

解夏草  
地籠祭  
昔又入

辻踊り一踊りく丸小生  
朝夕よ夕子見と踊り那  
踊りや糸の娘煮多し中  
踊りや欲の糸とやけつ  
好くお男と生とやら那  
我の踊り惚く文り踊り那  
舞夏草やまきと踊り那  
化粧く地籠祭や糸の辻  
やふふと度く糸煮踊り那  
教入や教とやら踊り那

約登  
了人  
蓮之  
高波  
<sup>信後</sup>馬明  
規道  
相雨  
<sup>江戸</sup>寒主  
許六  
<sup>河内</sup>泉斗

花火

相撲

け次多くとちり玉火が  
一あゝ花火万もふ交光り  
瓢箪の約もや弁衣は火火  
却少も位きくてもりお撲お  
角力取らぬや秋衣うり給  
よ此衣のこころ補やすふ取  
下帯あふ中あしとも系お撲  
十八とつ川と替ふ角力とら  
帯とあ後生取ひや中あ取  
築前うらふよやすふとら

神叔  
其角  
七宝  
太来  
気宜  
其角  
許六  
汎休  
史邦  
山峰

秋八

扇置

捨置

初嵐

投らぬ礼とく遠入る角力  
傍りてその敷置くお撲取  
角力とり候棟の名よ海あ取  
付くと流と見る秋の扇置  
扇置く秋衣はより物あ取  
秋の風あひれ破く扇置取  
相あ系の捨く見きく流置取  
浪引く心も川うり捨置  
相の系置流とくとも嵐  
きよくや敷の中ち初あ取

立吟  
涼菴  
冰花  
小春  
拳堂  
尚公  
唐亮  
羽舟  
子川  
且葉

秋風

さ川風風着の家荒より  
あしくや日あつあつ秋の風  
秋風や葉も細く不破の関  
半の空を了飯の遠弱秋の風  
うらうらとぬす秋の風  
秋風の吹くころころ秋の風  
あそび風もほろほろ秋の風  
秋風の心もあそび風も  
あそび風もほろほろ秋の風  
あそび風もほろほろ秋の風

洞子 芭蕉  
秋風 松風  
松風 松風  
松風 松風  
松風 松風

秋九

別立一つかりる秋の風  
約針やなかりる秋の風  
夕敵の真をく秋の風  
ちうちやを秋の風  
何ありと秋の風  
秋風や稲うり秋の風  
とせと秋の風  
秋風や萩秋の風  
秋風や萩秋の風  
秋風や萩秋の風

曲翠 正秀 外高 越人 支考 万子 踏通 予那 許六 希因

夕子入

冷

秋暑

露

夕子志也や宵曉の舟志あり  
秋らしとつり風者志也あり  
冷くしと壁とゆまへく空際  
梢乃くまきくあり秋の露れ  
やくそくの秋色くけく雲  
秋もゆき後ありく秋あり  
ふさやせふふかたふさ直所  
秋者や枝の外も芝の起り  
夕子の志也枝ありと家の金  
ふはゆや指りてき海字のふ

其角 芭蕉 支考 曲琴 乙由 宗因 去来 嵐雪 荷弓

秋十

霧

朝露や我鼻新少半老古  
早の露風よとつと何の通り  
ぢりふと似く似ぬりのある家  
名月の露もあつとく子あり  
秋多つとの花一色よゆり  
秋露や廊下花と乾人老也  
秋月とつと秋多く見たり  
帆柱のあつとゆき霧のむら  
川たつとゆき霧と霧の霧  
秋多く果やゆき霧とつと

荆口 助叟 之白 北溟 可風 涼菴 若角 小枝 可風 之書

稲妻

朔夜や何處中より響きあはれ  
鈴鈴や光東あくるものあり  
稲妻や海老西城ひらけん  
いよ川も如くの光東も空を  
かれつゝの如きまをひり言夜は  
稲妻も二本はゆくとむ小松原  
つれ妻やわらわらうてあも其  
稲妻の只は落るお山の上  
稲妻も如く目も如く雲より入

朔夜  
不文  
色蒼  
其雨  
去来  
如及  
楓受  
丈草  
山夕  
秋十二

稲妻はよいとく一帯一帯あり付  
つれつゝのふかす乾や木の布  
いよ妻やいより其くつれ夜は  
稲妻やうけく走る雲の玉  
稲妻や如くもあはれを採の上  
いよは如く石山寺如く女中  
稲妻や響てひるやうは毎の上  
いよ妻や山之原をせぬめて切  
いよつゝやれ如くたし袖入  
稲妻もや何處落して水のえ

楓受  
蹄取  
己ん  
厚為  
柳花  
唯妻  
希因  
斗重  
寸馬

草花

草色くおのく花乃まのり  
名残ゆくもさ凡古のや草花  
草花や秋志り散りおのり  
いりしにあら名をいれしは  
少れ可くさくのもうそ草の花  
我ももよほてもやう草花  
乃のくお木槿のりま喰ひ  
あふまの位も似る木槿  
手とりけりおのり  
木槿の跡くおおのり

芭蕉  
低身  
支考  
露  
や  
己筑  
芭蕉  
枕  
人

木槿

秋十二

女郎花

海ひひ川垣に宛あく木槿  
わう一日くくくく  
聖口の半笑をある木槿  
能の葉みすは花きくむけ  
一日中をのりハをいれけ  
あつた日の春もささくむ  
いりろくくくく  
身は上り書くおのり  
黄も来てお替りくお  
小刀りよと愈りお

乃露  
座元  
江  
老士  
燭石  
上  
架一  
芭蕉  
涼菫  
芙蓉  
万子

男節花

葦

多勢外通るぬるや女節花  
撮入り立寄るるや世に  
吹く入公多し杉の影  
東中にひらりたる女節花  
我相り手おもひ杉の影  
志願するありてや男節花  
秋の神さく入の影く男節  
つゝるぬか多し杉の影  
秋の影く入の影く女節花  
葦や屋敷下は門節花

葦本  
封ト  
涼袋  
秋瓜  
葵太  
斜炭  
半睡  
年路  
秋風  
芭蕉  
秋十三

朝の影は影よふ山と万よ志願  
秋の影や夜多し杉の影  
葦多し杉の影よ杉の影  
胡蝶やまじりひらり杉の影  
槿や秋夜の影よ杉の影  
秋の影や入る杉の影  
朝顔の影よ杉の影  
あき秋の影よ杉の影  
いさよ杉の影よ杉の影  
秋の影や杉の影よ杉の影

破笠  
史邦  
戈磨  
十丈  
燈元  
免士  
巴静  
木兒  
秋瓜

瓢

瓢を以て釣瓶と云ふは水  
を以て白濁し深ては強き  
疾くして其の味も亦瓢  
已る事あり片尻けり瓢の形  
針立の極く遠くありて  
きつと瓢を以ては瓢の  
鏡やうに換瓢といふ事あり  
又又又又又又又又又又  
吹礼の目算出ゆくや  
牙の果も志して記さるる

子代 也有 枕妖 凉菴 許六 風草 乙筑 京 丹後 秋十四

萩

盗人萩を志すは萩の  
ふ萩もあはれき萩のう萩  
あつらへるも萩の葉あり  
山萩の涼休あはれき萩の  
多うらとて萩の葉あり  
萩の葉ありとて萩の葉あり  
ふ萩や海谷川老浪あり  
あはれき萩の葉あり  
下拵て直直しり萩の葉  
白萩や萩一升りむ一升

青岸 芭蕉 京 李由 言水 禹洗 萩人 文素 秋風 萩六



萩

ふ萩如きもふ萩も花の衆  
秋風の口まぬきもや萩の音  
萩の音や灯りて後の音  
おくやふ戸なきは萩乃吉  
満より強いくんや風の萩  
萩の音や音はうもく萩の音  
をよましく白ひてや萩の音  
物まき一蓮ある異一蘭を  
萩の音とあつたく萩の白れ  
詩と比ふ萩おりりらふの音

萩二  
季吟  
尚公  
雪芝  
香平  
饒夏  
巴静  
文素  
子砂  
周介  
秋十五

葉

夏袴  
芭蕉

予固と表比ふれや萩も海  
舟と舟の帆とふ風の芭蕉は  
とを萩の音やちふ山月萩の  
はせとやや萩の中れ萩の音  
己合は少あふもあふる芭蕉は  
破る萩の音かひく芭蕉の音  
小車やむし萩の音のあり萩  
独ひも尺をたき萩の音は  
花萩の音は閉る萩の不揃は  
秋はちくとも萩の音の音は

夏袴  
芭蕉  
可風  
香川  
乙女  
一品  
支派  
一晶  
乙女  
香川  
可風  
芭蕉  
尾法  
羽雲  
露川  
風色  
方次

小車の花  
指授

ひふ目のついで破らるる	乙代
栲樹の心咲時やんと云ふれ	乙妙
粟の實孔ありやちる	乙由
西東種ありけり	左送
畑うけ出せしけり	七雨
秋の日試草虫よ咲や	李溪
瓊瑤色よ咲て	涼亮
菊草二百十日も	可磨
焼く水やちる	
松の焚けしあり	

やいゝ花子たのひ	斗周
子日お千種まつ	恭國
花菱荷さくや	隆五
刀豆や七日八日	三仙
花先や草生け	三四
道草ありも	免貴
目もよや	法漢
瓜ふらぬ	其角
西瓜や	許六
妻よす	

大子草  
角力草  
仙舟花  
茶少草  
菊草  
蔓珠の花

炙花  
子日お  
花菱荷  
刀豆

柑金花  
益母草  
西瓜

番椒 緑瓜

出女衣の如井、む瓜の如  
あけきぬまほしく抱つ瓜の如  
盗人のあらしりてハ西瓜の如  
滝臺のひまをささく瓜の如  
ついであつたきぬ西瓜の如  
名を厚まます秋は似く表す  
月文くへちの如や雲の如  
まかくてもぬくまおとる如  
石をりて、くくおそる如  
石をりて、くくおそる如

長紅 瓜 治之 物涼 去来 支考  
休賀 芭蕉 木節 邱坡

秋十七

木瓜の実 蓮実花 早稻

度より、茄子の朱も赤集の如  
吉那板の仕給、あや番椒  
此那さか揚赤く、夜のり  
ふく、い色、あや、か  
あくと、あや、番椒  
木瓜の実や、あや、汁の中  
蓮実花や、花、ハ、蛙の、あや、む  
蓮の、あや、あや、あや、あや  
あや、あや、あや、あや、あや  
子、あや、あや、あや、あや

来山 四芝 露川 豆胡 琥珀 斐文 猿紐 芥末 柳儿 乃龍

焼禾  
秋の致  
秋の蠅

うらみひのつらみくや子福のじ  
新し風くくやまぬり早稲作り  
子福も種は出さ大車の糸を  
焼禾や麻きく入りきり  
新し飯や忘れ時製秋の雨  
秋子や色くまろく坐せを  
あだの飯や友の減せとほくら  
秋の饅子子とゆく追出ぬ  
つくはこそ日南追ゆく秋の饅  
る子尾よゆり控りや蜂老饅

芙蓉  
嵐書  
林石  
申跡  
田友  
文黄  
呂言  
野亭  
琴丸  
虚白  
秋十八

秋の蝶  
種の蜜  
秋の蝉

怪子のかきぬまうとと蜂の蝶  
井もれ交る房は胡蝶あそびあり  
ゆふのしら花はく俳一秋のてく  
おとく多けお花やや梨の蝶  
あそびれ交る花と衣や秋子蝶  
あはれと光るぬ秋のほろろれ  
秋の雨も子も座なりやうぬら  
ぬまうとと並く死種の蝉  
く秋事の追へまろく秋老を  
己と理とひつらつてや秋子蝶

と考  
和及  
可風  
山珠  
雨麦  
古声  
此若  
一笑  
丈草  
晚山  
才人

蛸

蜻蛉

いづくとも方の果なくや秋の蟬  
泣くも蟬よひうれく蟬の蟬  
秋のせと泣うりしるをふり  
日くりや換く至ても昔の日と  
蛸や山田哉為子水衣を  
寒蟬の啼あまのり夕月夜  
日くりやまのぬきと昔の  
幻の秋虫なりと赤木結城  
蜻蛉の歌ら大く月玉を  
まよふや蜻蛉ついに泣く

文素  
秋水  
杞柳  
すて  
楓舟  
有琴  
里桂  
支考  
知是  
秋之切  
秋十九

松虫

蛸虫

蛸虫

蜻蛉の蝶去哉抱ゆれ物日れ  
冬ん海木何の味あま平哉先  
冬ん海木やまのり夕月の上  
冬ん海木やまのり夕月の女  
冬ん海木の味あま平哉先  
蜻蛉やあまのり夕月哉抱て  
冬ん海木やまのり夕月の哉より  
冬ん海木やまのり夕月の哉より  
蛸虫の泣くも蟬よひうれく蟬の蟬  
秋のせと泣うりしるをふり  
日くりや換く至ても昔の日と  
蛸や山田哉為子水衣を  
寒蟬の啼あまのり夕月夜  
日くりやまのぬきと昔の  
幻の秋虫なりと赤木結城  
蜻蛉の歌ら大く月玉を  
まよふや蜻蛉ついに泣く

治若  
探心  
芭蕉  
近江  
汗雨  
許六  
巴静  
石柯  
支考  
松宇  
昌彦

蟋蟀

ふせろく枕の下や起るくは  
おうけく度々も如禱のあり  
はれぬあれぬ掃そ起るくは  
灰汁桶の字やまきりきり寸  
草の多かりし起るくは  
葉のさくくは起るくは  
桶の輪や起るくは  
さしき起るくは  
あのおやま起るくは  
河の川と子も起るくは

色蕉  
丈子  
九兆  
高川  
羽牛  
留方  
舎就  
佐吾  
無洗

秋二十

機織

妻家のあひま川とるお起るくは  
嘆や灰衣中とるきりくは  
きく我も壁より起るくは  
新しく人々や起るくは  
主院も機織とるくは  
機織や定ふも起るくは  
そと織やとあ起るくは  
端唄も起るくは  
かま起るくは  
うのちりや刀豆ひく切起るくは

范字  
流く  
以裁  
季友  
巴静  
乙信  
乙筑  
史邦  
十丈  
鶴之

蝸婦

竈馬

勢多美子老あはれいこ

千種名目かゝるた竈馬

海士の家ハ小海老よ海いこ

あはれや款よ飛つく袋よ

こゝろおやあゝ追ひつゝ

藤子虫あはれや入江の夕日

しの虫やあはれいこ

美虫やあはれいこ

こゝろの啼く枯木の風情

川竹やこゝろあはれいこ

昌方

許六

芭蕉

北枝

孤庵

文泉

翠樹

杜若

倒泉

耽任

伏九一

虫

ひつち田より赤く啼るいこ

まよこく青書くいこ

川水老枝あはれいこ

虫く起く啼く周糸あはれいこ

雨さむくあはれいこ

遠せりり驚追ん虫のいこ

屋根まぐたあはれいこ

虫くものあはれいこ

燈の流く胴よあはれいこ

啼く虫のあはれいこ

風子

芭蕉

元貴

乙女

怒風

玄梅

李由

勺宣

正秀

京  
かち

虫筆  
 秋の、或は、捉て、虫筆、  
 吾能と、災く、祝、  
 於、  
 西、  
 虫賣  
 虫合  
 虫採  
 虫吹

七、  
 之、  
 ち、  
 秋、  
 吾、  
 於、  
 西、  
 虫、  
 虫、  
 虫、  
 虫、

改志  
 素  
 正  
 貞  
 光  
 貞  
 貞  
 貞  
 貞

秋七二

鷹の山別  
 八朔  
 田雨の日

八、  
 八、  
 八、  
 八、  
 八、

月  
 水  
 田  
 田  
 田



法行器  
放生會

法行器や赤きと後と男は  
礼り事多しんて放生會  
尾さかもつれ情を放生會  
纏うさくらうり放生會  
山花や養ふつ多き放生會  
何事かあつてくも似る月  
あそこのは海旅をくさる  
くさくさな庭を丸くや三の月  
く人の憂慮れ種や秋の月  
月歌と波あがりの水鉢

山花也  
松花也  
寺吟  
葉碎  
乙由

三月

月

色葱  
文考  
已百  
貞徳  
立圃

秋九三

待宵

月とわく梢あるをたふさう  
来跡さへいれ独り月夜に  
我病もく家もんをりて寂れ  
岩場や夜もあつて月夜に  
おろくと起るも月の光り  
分おれと寝て海の月夜に  
酒飲りて足もたあり水衣も  
聖もわく聖もける月の光り  
泳人出くも山花松花子  
待宵もわく聖もける月の光り

芭蕉  
昌碧  
素書  
去来  
初月  
露川  
幸平  
冠黄  
寸残  
文考

名月

侍月あつし徳あり雪月和  
月よみわ聖の令あまをれ事  
月よみや夜よみ今あつし  
名月や元月あつし秋一夜  
名月や池あつし夜も池  
名月よ林あつし田のあつし  
名月やつしあつし池  
名月や池あつし秋のあつし  
名月や池のあつし秋のあつし

牧亭  
跡披  
系松  
元月  
湖春  
芭蕉  
信位  
木岡

秋六四

名月や夏の上り松の秋  
名月やまじり遠川水の上  
名月や椽よりまはる春の  
名月や池もせり秋の上  
名月や雨よみあつし秋  
名月夜半あつし秋の上  
名月や一秋あつし秋の上  
名月や宵あつし秋の上  
名月や子あつし秋の上  
名月や子あつし秋の上

其角  
嵐雪  
太来  
文字  
去芳  
許六  
木節  
涼菴  
与考

名月や夜無影日よしの夜  
 名月や秋の夕陰もかすみ  
 名月や雨の如きも秋の夕  
 名月や富士の山もや秋の夕  
 名月や虫一交夜もよしの夜  
 名月ややりの風もよしの夜  
 名月や春の麦の花もよしの夜  
 名月やおもしろくもよしの夜  
 名月や滝次起る夜もよしの夜  
 名月や風もよしの夜

秋風 裁人 知行 素花 杜若 梢風 李由 轍士 酒市 希因

今日月

名月や掃きしゆく松の影  
 三井寺の門たたくもよしの月  
 名月の月もよしの月  
 文しくも鞠壇もよしの月  
 富士山もよしの月  
 甲斐の山もよしの月  
 相見もよしの月  
 やまはよしの月  
 ちかき夜もよしの月  
 夜もよしの月

秋涼 芭蕉 踏水 言水 支考 智月 山峰 乙由 忍尺 梅路

月見

雲影くみぬ花をささる月見ハ  
歩けりつる字も海をて月見ハ  
育らり唾のかしは月見ハ  
舟引の道うさげは月見ハ  
川とみかき細とあらは月見ハ  
ちのちの歌を月見ハ  
麻の枝踏ちる脊は月見ハ  
向のよれ家も月見ハ  
飛入る衣あらしも月見ハ  
何れ文藝家のもも月見ハ

色蕉  
去来  
文孝  
枚風  
支考  
浪化  
菅良  
正考  
免費

名月雨

秋大

十六夜

降こみくし宵ありぬ月の雨  
ふの月何ほとも外に落ぬら  
雨やに衣通昨やうふれ月  
いさひあふ月入る月見ハ  
やもくし出くは月見ハ  
いさひあふ月入る月見ハ  
いさひあふ月入る月見ハ  
いさひあふ月入る月見ハ  
いさひあふ月入る月見ハ

尚念  
越人  
妻波  
芭蕉  
太未  
大正  
近  
田坊

初潮

初潮や海に下り帆上げ舟  
初月や鳴るの浪に花柳舟  
まじかや貝のとりはく門柱  
は川潮や小春舟中に月の影  
初し深や海に下りし沖の石  
あはれくまを海ゆく舟か  
花もともたりんき跡か  
何奴と跡か小窓ぬまあくる  
一番りり葉山子と去る暴風  
跡か尾下りつれは跡か

出雲  
九北  
柳若  
乙河  
舟母  
猿籠  
芭蕉  
苔水  
許六  
前口

跡分

冷くと朝日さし其の暮風は  
比叡たかく吹えきや跡か  
小系女や跡かおむかえ予  
滝持のりゆさきや跡か  
ゆんさるや跡かよ向か  
おる跡か雲のへさや乾か  
ほりさの古哉遠り暴風か  
夏笠者骨名く候のりか  
机まむや遠のりか  
机まむ一駕も出のりか

支考  
言水  
その  
琴風  
九節  
柳志  
東眺  
反朱  
津香  
素因

机寒

謝を

秋のや、厚なりそりふをいれ  
謝を申す意は火より秋の教  
角と申す中、秋は秋の輝あり  
や、冬と申す花も枯らぬ  
すくもくもふくもははるる  
秋をいれ、秋は秋の輝あり  
朝をいれ、朝は朝の輝あり  
入道の下、秋は秋の輝あり  
友をいれ、友は友の輝あり

野坡  
謝考  
天堽  
風園  
松山  
音九  
青湖  
耳考  
芭蕉  
文章

九九八

吟  
朝を

夜寒

木枕より、秋の夜寒をいれ  
川をいれ、秋の夜寒をいれ  
舟をいれ、秋の夜寒をいれ  
舟の夜寒をいれ、秋の夜寒をいれ  
舟の夜寒をいれ、秋の夜寒をいれ  
舟の夜寒をいれ、秋の夜寒をいれ  
舟の夜寒をいれ、秋の夜寒をいれ  
舟の夜寒をいれ、秋の夜寒をいれ  
舟の夜寒をいれ、秋の夜寒をいれ  
舟の夜寒をいれ、秋の夜寒をいれ

秋麦  
心斎  
近江  
程巳  
怒風  
李由  
素行  
江芦  
大川  
巴靜  
跨山

約亭

瓜敷も旅のそとや約亭へ  
約亭や岩かたなき、菊松山  
寺もむへ遊坂より冬川儀へ  
口もも笑聲あふく約亭へ  
桃焼より灘上の流や志乃むへ  
山下はもと一帯の志乃山や約亭  
さふさふは彼者かたや兼宗  
後生もも実の合林のひうんが  
出代お曲突りおつたり  
おつたやけきもも葉とあふぬ老

荷弓 其角 正秀 曲響 許六 附尾 范守 如白 許六 兼宗 秋九

彼者

出代

二百十日

八朔松  
初お象

二百十日一日ぞりあろあ葉  
風もたき帯り二百十日うれ  
ハ新や茂理子款出たる先のは  
おつた酸ふ語のうらわおお葉  
山もくもくおつた雪やうらお葉  
深おお入るも先をぬお葉は  
裾山や房の中りもつたお葉  
事とつたお葉もつたお葉  
松のこもつたお葉もつたお葉  
おつたお葉もつたお葉

七里 好和 超波 与考 其角 九十 可風 麦守 木卯 此老

考

芙蓉

枝より花白くかき芙蓉は  
常雨の空より芙蓉のてんが  
川ありけり秋きく芙蓉の形  
そのゆのゆれは花のゆめ  
木犀や白くさくさやうれ  
月えぬ秋きくせいの後より  
おあはれつらして見よ葡萄は  
あまらうらやうとみる葡萄は  
心落ちし味のけりやゆめ  
ゆめともと思ひてみる花の形

芭蕉

園解

其江

如舟

園入

杜栄

茂秋

文素

文字

木犀の花

葡萄

花野

秋三十

薄

又安り道は花野は  
秋の子色をのりて花の  
おはもくつらと通る花野は  
あはれ秋と暮るた志のうれ  
八月のきく花うらや村より  
押きてる水ある花野は  
約買り出むる花のてんが  
三日月とたか光る花野は  
そのまじく葉おもひさる花野  
花野の角より花をみる花野

玄梅

文素

理玉

素海

不角

北枝

那明

素海

その

為有



花薄

秋の朧と拵ひかりし薄く乳  
 編つりし糸おちたる形  
 結吟のり末ひねりたる  
 糸の孔を髪より落し乳  
 花もく乳子つゆかけり  
 なる袖とすくえん花  
 福つまり春ありそと花  
 履撥くも花とすす  
 あれゆる牛の目も花  
 糸のたまりは花とす

李由  
雪之  
車番  
其角  
嵐雪  
許六  
久考  
素来  
赤忍  
篠原

かき草

花家  
藍の花

たんこぶ

紫苑

露草

葛

うら草の伝事とある花  
 かつらやまちりくつ草  
 花の上にあまの草花  
 岩の外の花とす

梅壺  
菅文  
重頼  
嵐雪

七尺より尺を志す人の花  
 花の月影おちる草  
 六の尾の澄あけり草  
 淋しきの上を草

梅壺  
呂曉  
二年風  
草吹  
柳居

一すつら花とす

葛の花

藤の影をよみわたりや若草つ  
き秋の秋もぬ木もかき  
秋のふき水よきくまのふ  
りやくとして静るや葛の花  
葛の葉のふく天の花よけり  
花さぬ人よき葛といふは  
春と背く跡菜や石の名は  
深井よとせきまきく赤か那菜  
黄葉の世よ白いぬ野菊は  
枝打によ蕭のまけり風仙花

鳳仙花

治天  
巴静  
宗因  
山石  
朱杜  
芟川  
枕傍  
秋菊  
巴静  
珠明  
秋世二

鶉の花

鶉の花の来り時秋赤く  
枯のふきまきわかしや鶉の花  
笠をかきとふと月葉の鶉花  
鶉花や少くると垣下秋の枝  
けいとうあ枝はよぬぬらうか  
鶉さうハ初中後とぬ蓋うれ  
まゝと冬十夜と何くのまゝ  
夕のしほ暖も外一鶉の花  
鶉花や幾日うつく花は

空園

芭蕉  
万年  
支那  
東斎  
村江  
里冬  
宇麻  
巴静  
可風

酸葡萄

伊予の支那実も紫もかきおき  
鬼灯や才坊と名倉のうり  
鬼燈や飯の倉のうり衣  
つづもやかきまても秋の浦  
深うはまやこぬ根が口の中  
来りあつてくに花を結ぶ  
浦のく花よたかや春の  
紫の花をきんかきのうり  
秋海棠の瓜の色よあま  
白拭くおのけくや秋海棠

芭蕉  
乙由  
百毒  
魚波  
鱒魚  
春亭  
風草  
乙雪  
芭蕉  
支考

秋世三

秋海棠  
紫花  
縹紅

鴨上戸  
沢橋梗  
菜の花  
苗葉の實  
冬瓜  
冬瓜  
種茄子

物陰より何れもあつて秋海棠  
秋海棠の粉水かきあつて  
秋分もさかぬひを多とす  
子乙女の指くやうく沢橋梗  
菊の仲も少座の境や菜の花  
實のあつた苗の葉の葉  
柱はよくしなへぬかきあ  
冬瓜や菜のうりもあつて  
かきあつて二の河の秋人  
種あつた秋もあつて

信濃 香部良  
江戸 鴨上戸  
陸奥 菜花  
江戸 浮流  
江戸 冬瓜  
伊予 相兩  
方堅  
麻又  
免瑛

種類

牡丹根

芋

芋の莖

ぬのこ

牛房引

ふろく花をとりたりた子瓢

たぐれく名取まろし有種多へ

根と分れ牡丹や蝶もその口と

芋引やゆり月丘並たき水

芋の莖や月待里のわけ細

種磨くたれくえんもいふ

葉のあはれく抜くハぬりこれ

多れくろ牛まろしぬのこ

稲婦衣担くあはれくぬのこ

牛房引りうはれぬも偏くし

凡北

和巾

巴静

山川

色蕉

白哥

芭蕉

丹任

為有

馨水

秋武四

薬垢

木賊刈

木綿取

差烟葉

乃枕菜

ふりや冬虫つらう菜胡かり

節のあはれ下やきくまきあはれ

月乾たふん乾牛引り木賊り

節くのあはれあはれや木賊り

木こく取せし約の山と雨のき

小娘の除く神のぬりぬり

綿かろくちぬりく香や差た

あたまこ改りふくの灰ときり

乃引菜のあはれてあはれ目筆は

菜富や二菜の中れ糸のあ

心考

巨橙

圓危

巳干

其角

泥豆

祐山

龜世

智豆

尚公

苺子爵  
稲の花

けりまや種うゝぬき散ちた  
ふ家の米と事りういひのむ  
貴より葉長おや稲花を  
中のく葉山子冬低し、秋の  
さじくともあつらひ稲花  
きばりつゝたふしつねの  
うぬりふ稲の種おのり  
種よやく在中あ田も味も  
稲の救珠りち信ふ落種  
駕昇も道証しけり落種

落種

稲の種

京 冨南  
山峰  
露川  
梨節  
丹後 馬吹  
餘夏  
踏通  
嵐宮  
水導  
龜森  
秋世又

稲庭  
稲垣  
毛見  
田川  
粟  
稗  
黍

辻中へ扱込くり落種  
稲庭一をいこの園入、庭さ  
稲垣や秋十分り志い  
林一ろの毛見やふり  
丹社と種かくり、秋種  
尺ろちよ畔乃ふきり  
稲うやあ子の種く  
粟の種あゆめうく  
稗お種の子遊したる  
黍きひや取この秋乃と透へ

越前  
李由  
一桂  
大毫  
山川  
秋風  
起童  
素民  
裁人  
色蕉

若麦の花

三月の地を徒くそくの花  
靴火の毛上げくさや花の毛  
若麦の花様の花の毛  
花若麦やうらゝの後  
大根と隣りまゝ若麦の毛  
新とやゆい候と若麦は  
山北とや婿 洞老木乃大根  
新ともあつて柄ぬか  
あつたり入る若麦の葉山子  
たつたら根の山北くさ

芭蕉  
荒花  
乙妙  
支考  
若錐  
支考  
周如  
心秀  
梅嶺

秋正六

新若麦

葉山子

あつたりまゝ一役ありまゝ若麦  
種と柄の儀やまゝに若麦  
つらりと刈と若麦の葉山子  
並ぬけく面目も若麦の葉  
乞食少も若麦の葉か  
子杖も若麦の葉か  
一俵も若麦の葉か  
居風呂の下や葉山子の身  
葉山の葉も若麦の葉か  
欠風下ひると若麦の葉か

凍菘  
、  
祝井  
、  
破笠  
、  
舟体  
、  
支考  
、  
支考  
、  
他若麦  
、  
梅嶺

鳴子

山里あき響りてく於葉山子  
おあまより一季つと先く如く  
稲舟より葉後れたる葉山子  
鳥さへおほくくと鳴子引  
七十の腰もそくまき鳴子引  
胡象女ゆりあしき鳴子引  
あしゆき鳴子あしき鳴子引  
おいこぬ方より生れてわ鳴子引  
あつこより受徳と進信や鳴子  
谷あしに鳴子の綱や意の中

温故  
其角  
横琴  
已百  
天竺  
向次  
浄苑  
文章  
秋七七

引板

あれをくおまの力わなる子引  
布中より柿一本おま鳴子引  
おまぬ節よくしおま鳴子引  
丈山の庵あし引板の音  
夕つきたるまきく方わ引板の音  
林一さの庵あし引板の音  
おのちれ松子おま引板の音  
焼く先や山田吹たおま引板の音  
秋もこやあま水の水あし引板の音  
是よりあま一板とあま水

徳友  
盤古  
史邦  
路通  
文素  
不玉  
昌秀  
大虚

添水

焼帛

落水

搦衣

今冬もく嶮嶮に搦衣を水  
 流すの事猶と事より流し  
 閑子田んぼに下りて水  
 地ぞくろくもや懸く支石が  
 母の目のみぬけにまきまき  
 杉くも眠くまきく石が  
 子の位くまきくやまきく  
 猿引木孫の小神を祀る  
 搦衣木の事ほくも  
 産入の虫歯まひく搦衣

其風毛 我 蘭圃 其如及 形坡 尚公 山川 芭蕉 不ト 涼菟 秋共

鶉

古川の火燧ゆく地をぬき  
 芋の茎の竹ゆくあまぬき  
 十のころはやめくまきく  
 家来の搦衣ぬきくまき  
 ぬきけく我者かゆく  
 今心と搦衣してまき  
 月教もくゆくまき  
 鷹の目もくやまき  
 木の葉もくまき

杖豆 立志 孝茶 芋秋 蓮之 巳筑 梅富 芭蕉 文考 惟松



鴨

かきくもつ川も藤敷の鶴か  
鳴きもほくろのれ交勢のれ  
百舌もきけたるよあく鶴  
たすけりし海も居ては味鶴  
牛河もやに鴨の川もれ  
鴨立く日あ勢もよあまら  
鶴免く一とく長支家う形  
かしくもはるも鴨の川もれ  
はのあいそのまはし鴨声  
鴨の川もや声もくまあまれ

鶯凡 氣彈 兔士 柳儿 支考 尚公 冰花 文系 老来 丹後 日門二 秋世丸

燕帰

稲負考  
初序

雁

二羽てまゝ十羽てゆく雲のれ  
雲やゆりうまはは枝とや  
えを冬稲負考のねくもれ  
初うらや比良て追つて帆の舟  
と川もや帆の舟もれ  
はのうも後り物とくまはし  
まのうも後り物とくまはし  
なごもや竿もかす耐投法  
初くもあもあもあもあも  
又あくと鳥のや小田も

巴辭 涼袋 三流 木音 遠空 柳若 衣代 去来 猿鏡 支考

縮まづしは浦をかきや小田の丁  
 乃多子孤志をひ合まや吉野田  
 丁の後又送致定や舟の上  
 うらやとふもめくはる声  
 舟の焼くちろく時や舟は志  
 蓮花やあけくへ出た雁の面  
 飯屋ひく仕道てらじ屋は秀  
 川の石をききあつ事とふ田の房  
 夕浪や心のせうはあつらうり  
 船あし何は浦の上といはる皆

毛純  
 吉野田  
 舟上  
 源光  
 牧童  
 乙由  
 乙由  
 陸史  
 奈来

あ地へあゆみて夜は後りる  
 柴煮りつはくや布はくさる  
 持櫓は踏あはくしてわらわらり  
 山鼻やさうらふあつらるる  
 日さうる一里くは松板うら  
 はけ先のら萩のきり後り  
 名水やうや喰ちるは物な係  
 ひもろと南を村を突あやん  
 板の突らる標の羽まや胡阿  
 青雲下りほあしてるの後り

涼亮  
 支考  
 吾伴  
 文字  
 梨一  
 簗山  
 志之  
 山木  
 芭蕉  
 敬水

色考  
 標考  
 雨り

山雀 四十雀 頬赤 鶴鶴 目白 ひ日 葉載 連雀

山うろたててぬけりうら瀧のふ  
 老の林より初る如四十雀  
 老松の有ともあつて四十雀  
 夕日また木如赤のうら瀧  
 せねと、わくくつてくもらふ川系  
 在申る鶴鶴の尾松はもけ  
 押合く焚拵より目白が  
 指竿におらう如鶴のふゆ  
 志しやる如葉いふ松のうら瀧  
 連雀やひくちあつて松の中

兔士 徳元 芭蕉 拍掛 氷固 九兆 汎舟 水色 柳居 葵太

秋四十一

啄木考 けくこ 豆早 鴈

木つたのへまのりり敷名松  
 木ばくちや先松、まのき并ち  
 きぬてる枯りも松と啄木考  
 つくこちくたとの松冬ゆより  
 豆まけく早、まのき敷日南が  
 鴈ちくちや八日ま、あむ小松系  
 百舌あくち木着屋討れあひぬ  
 鴈啼わりのうさむ抽のうら  
 怪忽りし後まきつて幾百舌の毛  
 百舌あくち齒喰ちまて死ね

文字 木兒 五芝 万子 支考 九兆 高川 野水 他考若 若芝

鴨草莖

小鷹

荒鷹

鷹赤

太刀魚

河麻

沙魚釣

子莖下流中流小流

二月や拳より小鷹より

荒鷹れ羽風よりくおれ

太刀魚や平家流よりわら

太刀魚や彼の至ち取名のよ

毎火りかや浪の下むき

川きつれく啼き河麻

とせつりやへりよふ赤い

沙魚つら水村山部酒旗の

丹波

之川

杜國

伊予  
芳光

陸奥  
緑水

色蕉

難波  
涼菫

行三

尚空

秋四十二

江餅

和餅

鱧

小餅引

淡餅

賣人も義兵ももくろく

和餅や彌代の旁者強

初きけや張良忠誠持

とる鱧や九章の巻も

はつさけや市又海

釣らぬ鱧や里より

稲つるのよにわたり

引とく字砂と照り

餅をひて石とく

あきも鱧魚さし

直南

支考

家治

涼菫

支考

有花

志和

乙抄

岩倉

落能

崩梁

蛇穴  
鹿

さひして能くさひの水の院  
落能や夏あふたよの岨磯の能  
落能や日よく水岩の  
水音も墓よきや崩梁  
仰りも水魚のよきや崩梁  
く音うう月も浅らうの  
あは文羽の落能や崩梁  
その中へ這入るや蛇の穴  
追とく尾よゆん麻の  
麻てかふる角の志るや麻

如行  
重頼  
子代  
防風  
文季  
三巴  
麦水  
惟能  
北枝  
秋四十三

鹿麻の麻くたふ荒も  
あつしや宮工吹たる麻の  
仰はうか小萩りりか  
いんと啼鹿あし  
南大門建こましてや鹿の  
しうのあ改冬時あ  
麻のまろれ麻の枝の  
猿あ後中耳りり麻  
尾まほりあ明の鹿や  
小男荒やああよりけ

極陽  
太未  
芭蕉  
正秀  
涼亮  
荒雅  
凡睡  
其角

啼らんとて月夜の麻や辛細  
 振とく存うと山や嵐の角  
 伸とる腰とる細く志や志と  
 小買とく分限共淋し鹿の聲  
 麻のたつひと角あふうり  
 鹿のたつひと角あふうり  
 一とくと水一すしハ麻衣敷  
 麻のたつひと角あふうり  
 志や志と分限共淋し鹿の聲

文章  
 紋村  
 野明  
 魯九  
 糸怒  
 乙由  
 一  
 志士  
 春波  
 又筑

暁やあけの空に水麻衣敷  
 志や志と分限共淋し鹿の聲  
 麻のたつひと角あふうり  
 志や志と分限共淋し鹿の聲  
 志や志と分限共淋し鹿の聲

九月

重陽節  
 志や志と分限共淋し鹿の聲  
 志や志と分限共淋し鹿の聲

鹿笛  
 志や志と分限共淋し鹿の聲

鹿田姥  
 志や志と分限共淋し鹿の聲

二水  
 如及  
 文章

栗の苗句  
栗の酒

猿も木よりて栗の苗句は  
子の戸や日くはくは栗の酒  
二盃うら白ひみちくはくは  
被たうらつり栗の苗句は  
ちやく咲け九日ちり栗の苗  
然りの秋とてくは栗の苗  
栗の苗忘れぬ赤くは栗の  
栗の苗忘れぬ赤くは栗の  
栗の苗忘れぬ赤くは栗の  
公もくは栗の苗の一語なり

夷荆  
色蕉  
如賀  
豊水  
色蕉  
、  
、  
、  
、  
其角  
由平

秋四十五

菊句

月あまきくは菊の苗句は  
菊の苗句は菊の苗句は  
一色や他くは菊の苗句は  
物さくは菊の苗句は  
去せの能くは菊の苗句は  
栗咲くは菊の苗句は  
肩くは菊の苗句は  
栗合香に色くは菊の苗句は  
菊の苗句は菊の苗句は  
此を菊の苗句は

木岡  
卯七  
咲緒  
千山  
木兒  
年代  
吐月  
秋香  
陽和  
蝶友

栗の苗句

離

外の市

後骨

柿のまゝく歌の技端とらより  
 誇りても何やもろくは後のひか  
 外買とくかかゝるか月んが  
 飲ほく外は枕や市の月  
 ほくかか松喬拾りん十三夜  
 葉の後は外は足形くも月  
 りく木骨かかたもまゝ後ろ  
 まやこの火燧もほか后れつ支  
 後骨の鞘より葉あり後の月  
 葉の葉かかたりきてわはれろ

如泉 一露 芭蕉 柳舟 浮風 支考 凍菘 斜炭 心秀 寸許

種かよりる低もあり後の月  
 后の月つ山出さく居とて志為  
 才也夜のうさあまはのく  
 外買か白さよりり後の山よ  
 佛山か岩さく後の月んが  
 木骨の瘦もほくまぬ后のろ  
 後の月 初一投 ちうひまきり  
 脚も山も狂えく後の月  
 若く木骨とけありあまのろ  
 三日月の持形あり十三夜

游刃 杜若 比翁 百里 木来 芭蕉 豊流 乙由 危士 蓮之



豆の月

御遷宮

拾遺

射獣祭

残葉

われはいつらん重りしるや後の月  
二交あるあふ銀葉の中より花あり  
豆と喰く豆の花も詠もや  
芋畑多き荒れ草もや豆の月  
そとに拾遺ありぬ御遷宮  
拾遺交ありしるや西百年  
拾遺多きくくくくくくくく

文系  
乙筑  
魁貫  
司鐘  
色蕉  
立吟  
李由  
拾遺  
北枝

十日葉

紅葉

水仙より拾遺せてやのあふ葉  
いさよひ花つらふと菊  
冷ささや十日の葉を破と歌  
仏檀下り十日の葉を破と歌  
くく散り表とらふと葉を  
花とらふと葉を破と歌  
山姥の葉を破と歌  
藪の中へ入りてはひくく紅葉  
谷水に紅葉はくくくくく

涼菖  
色蕉  
休老  
徳愛  
木岡  
与考  
其角  
一頁  
乙由



推柿 深柿 熟柿 密柿 九毒 金柑

予能り橙を煮て後此柿の老熟なり或子老の爲り此柿の柿や多く滑く見ふか深柿や老の柿より少く入る揚り秋の老柿は熟柿は山より或は南を免ふ熟柿は川畔の柿多かりや昔密柿桐油或く少く入る柿の老柿は九毒母多居るとも此秋は及金柑や一分小判のありけり

尺草 新牛 乃文 巴後 文考 為有 色蒸 磐也 乙由 文鯉 秋四十九

柚 柘榴 榧 胡魁 梨 椽 園栗

吾は果はアんと辨す柚味は柿店老片隅り柿の色は介法と地と破る見ると柘榴は榧のうら若丹の木の葉は山々小深をかりと梨老を非るとも或梨は幾秋の夜の老柿味有るや老柿を煮く柿の水木葉の椽は此の人の去るは園栗の老柿のありは庭にあり是より此老柿を煮く石佛

源莞 雲江 冥南 嵐堂 乙由 四圍 色蕉 牡丹 為有

櫻の實

ふくくと帯ふりて桜のこぼり  
木も似たりねも小まに桜実なり

平賀

梅檀実

春の初梅檀のふたれはるり  
あつたの花より樹に核の實

杜國

椿の實

葉提子多樹りあつたぬこり  
南天の實

輻好

三葉実

南天の實  
子のまやたつたふも散り散り  
あつた葉のまじりし葉核なり

其角

梅嫌

けくあつた花のまじりし梅り  
ふくくと帯ふりてさくらさくら

加生

乙由

秋之十

脚の節

節つるのほくさつててお山  
九そと坂中にのやゆの縁う那

支考

うら枯

葉節も裁し約ありけりあつた  
うら枯の勢もゆるもゆるの尾

法九

うら枯やも解るふはるり  
うら枯や葉の蟹の片鏡

其角

秋牡丹

葉葉りあつた葉を葉を葉を  
葉葉りあつた葉を葉を葉を

其角

吹あつた葉もあつた葉も  
吹あつた葉もあつた葉も

其角

松露	万年書	見せが	其の穂	龍擔	抄ひ子	志の草
秋のゆきもみぢきんを高く	水のけしきとともを高く母を	秋好の峰はあつたけを高く	乳をかくと舟漕くはまのふ	おのれやまゆきをりちるを	天高く無うんとうをたらし水	志の草のくしり秋多きぬ
甲乙	雨象	貴黄	踏通	踏通	木守	志秋
秋						

初草	援草	いくち	お草	さや豆	豆引	豆引	赤草
さや豆の秋のふ	杉木とふたのめをいそげ草	木の葉おれ	お草やふくふくあつた山を	お草やうらけけはまの松を	松草やをぬ木の葉を高く	お草やうらけけはまの松を	松山
芭蕉	嵐	松志	児童	児童	児童	児童	児童

葺狩

葺うらや鼻の生ふの音かき  
葺うらや唇の赤も教ふれ  
うそくと喚くありや菊うら  
葺うらやくらしも兒もなり  
葺狩やあふれし人の顔  
葺かうやあふれしお中  
狼のけあふとやふ晩稲うら  
海うらと赤くはつ晩稲うら  
わつとて葉山ささけつ晩稲  
鉢切の子あふれしお中

之角  
正考  
山城  
利合  
三柳  
千代  
支考  
路徒  
徳愛  
吳侯  
兎良

秋八十二

晩稲

新芽

新酒

新もともり新ゆあふれ米  
我りく新酒あ人の醒やん  
是のち考るは新酒は  
糟くさけるや酒もつさる  
穂抄の御もたたく新酒は  
秋の葉もあふれし新酒は  
酒う酒いささけりて新とん  
隈あ起てのし及びの酒は  
水産り秋もささけし新酒  
尾とあふれし新酒もあふれ

一酒  
光堂  
之角  
祝牛  
呂諾  
強九  
伯老  
葵太  
城中  
彦探  
孟遠

濁り酒

新酒  
尾城の粉

初鴨  
霜消藤  
熊栗柳

古川鴨や田舎ゆきうらたのよ  
おのれはいつくく藤や春あけ

老あ  
李完  
遊刀

星月夜  
網代古

飛他お坊あちりやわしりふ  
星月夜定のちきと大蛇さよ

仙雲家  
尚公  
大隅  
雲道

露霜  
露霜

何おうも石橋ふはし月夜  
露霜り時お色もさぬきえり  
赤黄く酒さくもあしり  
初ふ川中一の敷もはしり

七峨  
雪芝  
小枝  
前口

秋二十三

綿

長支夜

枝の多あり蓋あさしてや露霜  
灯さりの神あしりあきり  
お霧のあけよとるおはしり  
はしり綿子免子耳あしり  
綿子や露霜りあきむけの雲  
初夜と四あしりあ秋はあしり  
秋のこや下七雲のあしり  
あ多泣あきく梅雲あきり  
秋はあきく長床あしり  
雲のあきりあきく後あしり

南枝  
用舟  
後川  
其角  
茶山  
好春  
和及  
任口  
北枝

秋あらしきらんかきもあそびを  
秋の夜より涼しくお人のそよぎを  
一志もあらずもあけのなきみ  
秋の夜もあけのなきみ  
子の泣き声あきまじく秋の  
つらき心もあきまじく秋の  
涼き心もあきまじく秋の  
あけのなきみ  
旅人の泣き声あきまじく秋の  
あけのなきみ

一笑  
許六  
李下  
文章  
氷花  
秋水  
雲口  
紅葉  
松園  
桐溪

秋八十四

秋の昔

枯枝より鳥も鳴らぬ秋のうれ  
秋の夕陽もほのぼの秋のうれ  
蜂もあけのなきみ秋のうれ  
あけのなきみ秋のうれ  
あけのなきみ秋のうれ  
あけのなきみ秋のうれ  
あけのなきみ秋のうれ  
あけのなきみ秋のうれ

芭蕉  
芭蕉  
木角  
野坡  
木角  
嵐雪  
大芳  
正徳  
和及  
越人



大きなる家なり秋のゆふへくれ  
秋のくれ菊をきくゆゆゆり  
つゆ家より帆をきく秋のくれ  
舞ふ家より帆をきく秋のくれ  
きく家より帆をきく秋のくれ  
舞のくれ欠くきく秋のくれ  
大なる家なり秋のくれ  
近き家なり秋のくれ  
疾風吹く秋のくれ  
おいてぬ人掛く秋のくれ

許六  
山石  
一笑  
未  
千春  
栄姿  
天弓  
角上  
若木  
孟達  
乙由  
秋又

行巻

川流とて舟をきく秋のくれ  
行秋や舟をきく秋のくれ  
春風の舟をきく秋のくれ  
川流の舟をきく秋のくれ  
舟をきく秋のくれ  
舟をきく秋のくれ  
舟をきく秋のくれ  
舟をきく秋のくれ  
舟をきく秋のくれ  
舟をきく秋のくれ

條友  
芭蕉  
丈草  
乙抄  
史邦  
吾仲  
狐林  
泊根  
彦元

秋や細代りとも毛水のま  
 け社やまのよとまの木の蔓  
 ゆく梅やひより方とり毛松の青  
 のあねや田多壁横の道よか  
 け秋やまろくはぬ海の色  
 冬はまの支友をま〜後冬  
 冬はや雪のん松を植くう  
 春は舞も白ひそま九月盡  
 春葉の枯れと知や九月盡

麻父  
 鱈考  
 千代  
 李完  
 鳥光  
 幸方  
 吾東  
 泥足  
 舎雅

秋今六

山  
 川  
 松

板橋の松



